



WAIM助成

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

孤立し引き籠りになりがちな養育困難家庭のこどもを社会で育てる事業

成果報告書

特定非営利活動法人ウイズアイ

ご挨拶

私共は子育て支援・親支援・地域支援をテーマに活動してきております。主な活動は、親支援プログラム事業・つどいのひろば事業・24時間緊急一時保育事業であり、年間35000人を超える親子の利用があります。

そんな私共が、2018年、2019年と2年連続で子供の未来応援基金の助成を受け、不登校の居場所づくり事業に取り組んできました。支援の対象を学齢期に広げたことで、10代・20代の若者応援事業へと発展しつつあります。

第2の実家を標榜しながら24時間緊急一時保育事業を実施してきたことで、様々な養育困難家庭との出会いがあり「地域の中での見守り事業」や「家族丸ごと支援」につながり、「子ども家庭福祉」に特化した活動を主軸とするようになってきました。

2020年は、社会福祉振興助成事業に採択していただき、安定した事業展開ができました。助成テーマは、子育てが困難な状況にある家族・子供等への配慮・対策等の強化に資する事業であり、応募事業名は「孤立し引き籠りになりがちな養育困難家庭の子どもを社会で育てる」事業です。不登校の子どもの居場所づくり事業の継続と、新たに医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業に取り組むことができました。

今年度は、◎不登校の居場所づくり事業は、3年目に入り、2年間実施してきて見えてきた三つの課題の解決にむけ取り組みました。

- 1) スタッフの育成。
- 2) アウトリーチの支援の必要性。
- 3) 「親父の会」の創設。

定期的な親の会を開催しているが父親の参加は皆無の現状。

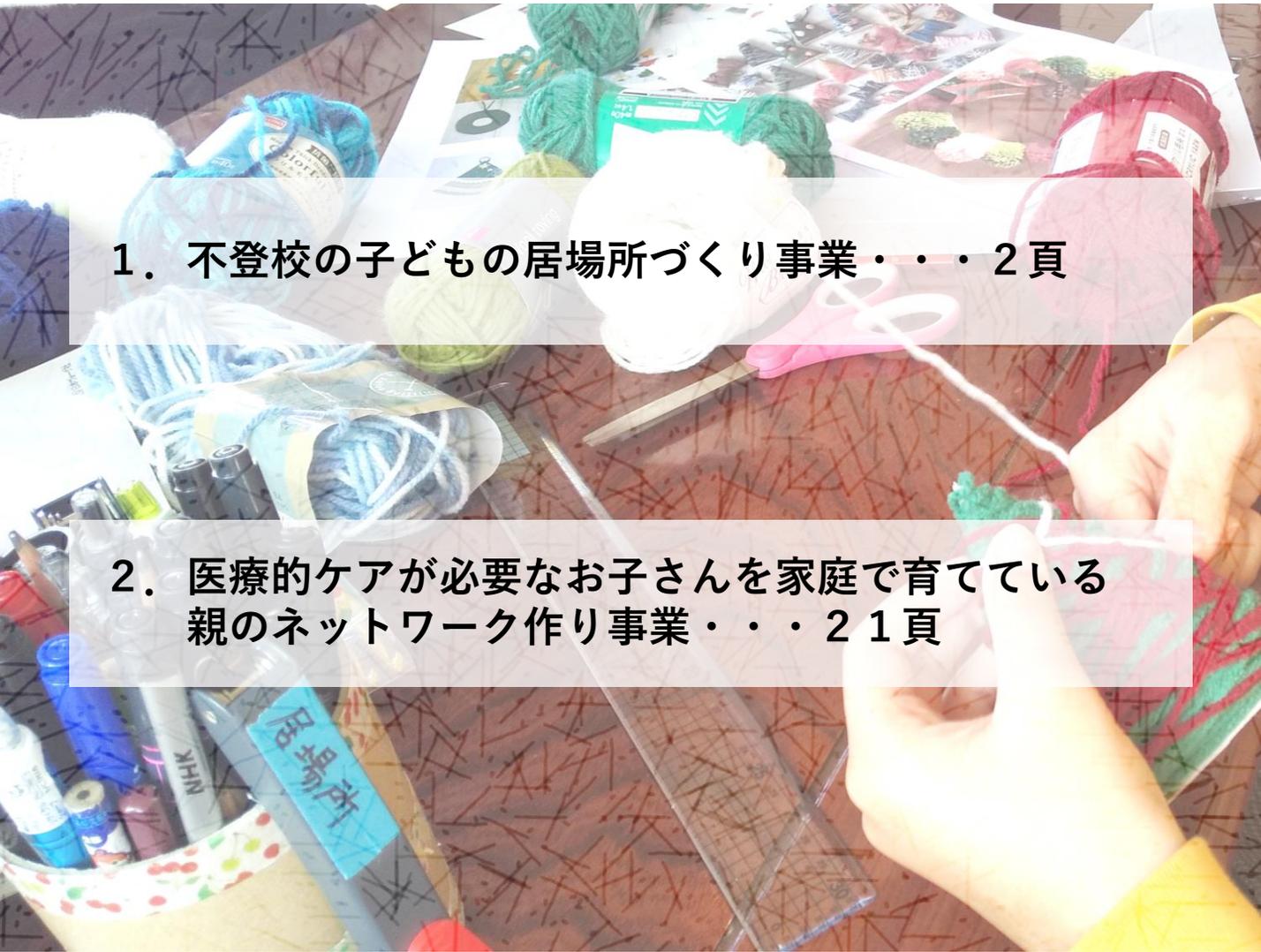
そして、もう一つの事業◎医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業、地域で孤立しがちな医療的ケアが必要なお子さんと親の出会いの場づくり。

独立行政法人 福祉医療機構 社会福祉振興助成事業に採択していただき実施できたことで、この二つの事業を通して、新たな出会いがたくさんありました。「多職種連携」の手ごたえとともに、今後は「孤立し引きこもりになりがち家庭」をつなぐことで子供を社会で育てる土壌づくりに寄与していきたいと考えております。

令和3年3月
特定非営利活動法人 ウイズアイ
理事長 吉松 治仁



孤立し引き籠りになりがちな養育困難家庭の こどもを社会で育てる事業



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業・・・2頁

2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている
親のネットワーク作り事業・・・21頁



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業

本事業は2021年4月で4年目を迎える。

事業立ち上げのきっかけとなったのは、当団体のスタッフが我が子の不登校に悩んでいたことだった。

この地域の子育てを25年以上見守ってきた当団体だからこそ、子どもの不登校に悩んでいる親達に「たくさん頑張って子育てしてきたよね。大丈夫、あなたの育て方が間違っていたんじゃないよ」と心から伝えることができるのではないかな。

この地域に行き場を失っている子ども達がいるのなら、当団体がその受け皿になるべきではないか。そんな思いから2018年に事業がスタートした。

この成果報告書では、2020年4月から2021年3月までの、本事業3年目の取り組みを報告する。

令和2年度 不登校の子ども居場所づくり事業

(1) 事業実績	3頁
(2) 居場所の質の向上に向けた取り組み	4頁
①スタッフの育成（助成事業柱立て1）	
②環境整備（柱立て5）	
(3) 親支援	7頁
①「ウイズYOU」「親父の会」（柱立て3）	
②保護者面談の実施	
③アウトリーチ（柱立て6）	
(4) ネットワークとソーシャルアクション	11頁
①様々な連携（柱立て6）	
②そらカフェ（柱立て2）	
③「居場所展」の開催	

居場所事業これまでのあゆみ

2018年度 — 1年目 —

- 不登校の子どもの居場所「ゆいゆい」オープン
- 清瀬市S S Wと連携
- 東久留米市の不登校の子どもの居場所「オニバスの種」見学
- おひさまネットワークとの連携
- 教育長へ挨拶・事業説明
- 近隣小学校4校、中学校1校へ事業説明
- 送迎による来所サポート
- 18歳利用者の生活支援開始
- 月1回の手作りの日「にじいろカフェ」開始
- 多事業「世代間交流サロン」参加者との交流
- 多事業「産後ママのサロン」参加者との交流
- 多事業「昭和の味」との連携
- 「うめのたけまつり」へ出店
- 「にじいろだより」発行開始
- 第1回ハンドメイド講座開催
- 初めての親の会を開催
- 障害福祉分野、グループホームとの連携
- 救世軍自省館との連携

2019年度 — 2年目 —

- 市内全小中学校へチラシを持参
- 市内小中学校のスクールカウンセラーを訪問
- 「そらカフェ」開始
- 「絵手紙講座」開始
- 親の会の定期開催の開始
- 第2回ハンドメイド講座開催
- 清瀬環境川まつりへ参加
- 夏休みの川遊び体験実施
- 療護園で「流しそうめん」実施
- 「森源太LIVE in KIYOSE」の運営スタッフ体験
- 開所時間の延長。（9時～18時）
- 社会福祉士をアドバイザーに迎える
- 定期ミーティングの実施
- 「赤ちゃんのチカラプロジェクト」と連携
- ひだまりの里のイベントと連携
- 親の会が「ウイズYOU」と命名
- 「ひだまりの里マルシェ」へ出店
- コミュニティプラザひまわりバザーへ出店
- 高校見学への付き添い
- ケース会議の実施
- 柳瀬川でバーベキュー実施
- ベトレハムの園「ワークサポート事業」と連携
- 利用者の就労支援開始



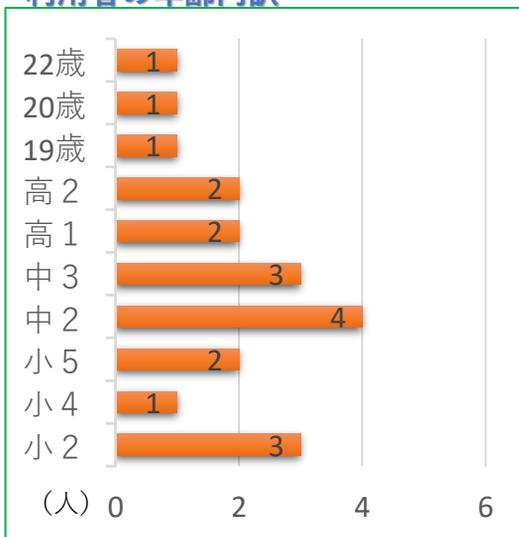
1. 不登校の子どもの居場所づくり事業

(1) 事業実績

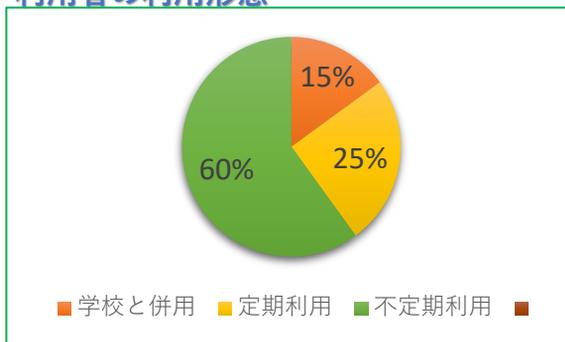
開所日：年間191日 うち稼働日167日 稼働率87% (平均2.23人/日)

利用者：年間延べ427名 実数20名

利用者の年齢内訳



利用者の利用形態



学校と併用：登校できない日に居場所に来所。
登下校の前後の利用もある。
定期的利用：日中の居場所として定期的に通所。
不定期利用：引きこもり傾向で定期的利用が難しい利用者、イベントなど内容に合わせて来る利用者、安全基地として過ごしに来る利用者など、様々である。



子ども達の希望で登下校の時間帯は避けて散歩へ行く。
不登校へ向けられる社会のネガティブなイメージが、子ども達に負い目を感じさせ、引きこもり傾向に繋がる要因の一つとなっていることは間違いない。
食材の調達など、機会を見つけて外に誘っている。(上写真)

子ども達のやりたい！は出来る限り応援する。この日は豆腐ドーナツ作り。(左写真)
季節の工作として12月は福笑いを制作。活動は無理強いせず常に自由参加としている。(中央写真)
この福笑いは、居場所展に来場者した子ども達にも遊んでもらった。



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業

(2) 居場所の質の向上に向けた取り組み

居場所の目的：子どもにとって安心・安全な場を安定して提供していくこと

① スタッフの育成（助成事業柱立て1）

アドバイザーに精神保健福祉士の和賀未青氏を迎え、ケースカンファレンスを含むミーティングと、居場所スタッフの育成研修を行った。

毎月第1・3木曜日午前中 年18回開催

前半：ケースカンファレンス

後半：スタッフ研修

参加者：スタッフ9名 延べ131名



<目的>

スタッフの知識・技術・メンタルヘルスの向上および居場所利用者の個別支援の充実

<成果>

- ・スタッフ間の信頼関係やチームワーク力が向上し、業務の効率性が高まった。
- ・定期的なケースカンファレンスによって子ども達への対応を確認でき、居場所の安全性が保たれた。
- ・スタッフの価値観や視野が広がり、子どもや家族の多様性をそのまま受け止めることで、子どもへの声掛け等にも良い変化が見られた。
- ・研修は個々のスタッフが自身を内観する時間にもなった。業務における葛藤や不安が自分にとって何を意味するのかを理解するプロセスは、自分を保ち落ち着いて子どもと向き合える力に繋がった。

スタッフ研修番外編

国際公認フェルデンクライスプラクティショナーの石田耕一氏を招いたグループセッションを行った。研修は一貫して「自分を主語に」「自分を大事に」をキーワードとして行われ、この番外編では自身の心と身体の状態に耳を傾ける体験をした。スタッフのセルフコントロール力の向上に期待ができる。（上写真）

外部研修への積極的な参加

近隣の障害者福祉施設が主催の、事例検討会形式の勉強会に、スタッフ4名が参加。障害者入居施設職員、児童養護施設職員、臨床発達心理士等の専門職の他、関心のある地域の保護者、居場所のスタッフを含む子どもの支援に携わる方々が集まり、提供された事例に対し様々な角度からできることを検討していった。スタッフにとって大きな学びの場であると共に、他団体と顔の見える関係を築くことにもなった。

事業1～2年目に上がったスタッフの声には以下のようなものがあった。

- 「資格のない素人の自分が、不登校の子どもや保護者の支援なんてしていいのか？」
- 「何気なく言ってしまった一言が子どもを傷つけてしまうんじゃないかと怖くなる」
- 「自分の対応が合っているか不安」「不安定な状態の子どもへの接し方が分からない」
- 「勉強を促さなくていいのか？居場所では何を目指していくのか？」

これを受け、3年目となる今年度はスタッフ全員で事業目的を定め、共有するところからスタートした。“子どもにとって安心・安全な場を安定して提供していくこと”という指針は、対応に迷った時の拠り所になった。また、事例検討会の頻度を前年の月1回から月2回に増やしたことで、専門的見地に基づいたアドバイスがタイムリーにもらえ、現場に活かすことができた。これらの取り組みはスタッフの自信と安心に繋がり、同時に居場所の安全性・安定性を高めた。

令和2年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (2) 居場所の質の向上に向けた取り組み ①スタッフの育成

居場所スタッフ研修事後アンケート 全17回実施 回答84名

満足度を教えてください

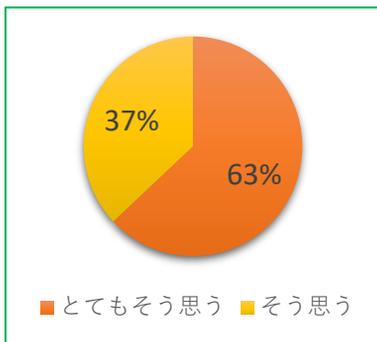
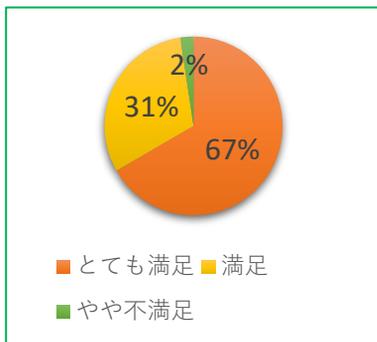
- とても満足 ●満足
- やや不満足 ●不満足

参加したことはご自身の生活・仕事に活かせそうですか？

- とてもそう思う ●そう思う
- あまり思わない ●思わない

参加してご自身の考えや気持ちに変化・気付きはありましたか？

- あった ●少しあった
- あまり無かった ●無かった



アンケート自由記載より抜粋

- ・自分に負荷をかけ過ぎず仕事に臨めそう。
- ・ネガティブな思考も悪い事ではないと思える様になった。
- ・命に関わる事については、間を置かず共有出来ると助かります。
- ・多様な視点や様々な角度から見るのが、改めて大切だと感じた。
- ・事実と感情を分けてみることの必要性を強く感じた。
- ・良い悪いではなく、持った感情を大切にすること。
- ・内観する作業の大事さを気づかせてもらいました。
- ・ケース検討が印象に残りました。とても建設的な時間でした。
- ・自己満足の支援にならないように、という言葉が心に残った。
- ・ストレスを吐き出せた。
- ・自分の思考の癖を再確認した。
- ・居場所の現場では、治療者ではない気持ちを再確認。
- ・共存について興味深かった。
- ・精神の病いに対する先入観を取り払われた。
- ・自分の短所だと思っていたことを肯定してもらえて、自信を失わずに仕事が出来そう。
- ・自己肯定感が低い＝良くないというイメージがあったが、それ自体に疑問を持ったことで、子供への接し方も変わると思った。
- ・自分を大切にすること。スタッフも各々を大切にすること。だからこそ、支援ができる。
- ・きちんと研修してもらえるので、居場所の仕事に対して、前向きに考えられる様になった。
- ・自分のリラクゼーションレベルが、人に対する時の自分の心持ち、雰囲気、相手の感じ方にも大きく影響することが分かった。
- ・子どもとの接し方や、子どもの言動に対する考え方に気付きがあった。
- ・前日の来所者の様子にとても気になる所がありましたが、明日のmtgで話そうと切り替えました。実際に話が出て、安心しました。
- ・「あらねばならない」スタッフで居ようと思わず、ありのままそこに居ることが大事だと思えた。
- ・スタッフの皆さんを知れること、人となりや価値観を聴けることが、とても嬉しく楽しい時間です。
- ・ちょっとした出来事を共有することで、背負う重さが軽くなりチームを感じた。
- ・同じ研修を受けても、みんな気付きや変化が違う。それを聞くことができてよかった。チームの結束につながっていると思う。
- ・自分自身も他者も、気づけたことを共有できるチームになったことが、業務の効率化につながったと改めて思った。
- ・とてもレベルの高い、有意義な研修でした。ありがとうございました。

“ありのままの子どものことを認める”ということは、何かを基準として対比したり、常識的な良い悪いの判断、より良くするにはといった視点を一旦脇に置いておかなければならない場合がある。スタッフ研修で自分を内観し、自身の価値観や思考の癖に気づいていくことは、子ども達への善意や支援の押し付け、思い込みを防ぐことにも大いに役立った。ありのまま、ただそこに在ることを認められているという実感が、子どもの居場所の出発点である。知識や技術面の向上だけを目的とせず、居場所の基盤作りやスタッフの精神衛生およびチームワークの向上を図れたことが、今回の研修の特徴である。

<課題>

困難な状況の子ども達との出会いにおいて、ケースカンファレンスや専門職からのスーパーヴィジョンの必要性は明らかだが、その体制の維持に必要な資金の調達が課題である。





1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (2) 居場所の質の向上に向けた取り組み

②環境整備

新型コロナウイルス感染症対策

令和2年度、新型コロナウイルスの影響により休校となった市内公立小中学校に合わせ、居場所も6月からのスタートとなった。室内で過ごす時間が長いこと、スタッフで検討を重ね、主に以下のような感染症対策を行った。

- ・利用者およびスタッフ各自の感染症対策（マスク着用/手洗い/消毒/ソーシャルディスタンス）
- ・共用スペースおよび共用品の消毒 ・来所時の検温 ・こまめな換気
- ・利用者が多い時には2部屋に分かれて過ごす
- ・換気に伴う室温変動の対策として、冷暖房の整備 ・空気清浄機や加湿器の導入
- ・飲食時の飛沫感染を防ぐ席の配置 ・飲食物をシェアしないこと など

<成果と課題>

感染対策を取ることで、子ども達への影響を最小限に抑え事業を継続できた。前年度までの居場所の特徴の一つであった、食を通じた地域の人との交流は実施できなかったが、感染経路が明らかになってきたことで、事業の後半では感染対策を取ったうえで居場所内での簡単なおやつ作り等が再開できた。また、スタッフは体調管理を徹底。風邪症状にはいち早く受診し、PCR検査を行い、安全確認を取りながら事業を行った。

来年度も対策を取りながらの実施となる。
その中で子ども達の体験機会をどう創出していくかが今後の課題である。



ICTの導入（助成事業柱立て5）

- ・引きこもり傾向の子どもが自宅から繋がれる方法として、「居場所ZOOMタイム」を実施
- ・スタッフミーティング、スタッフ研修にオンラインを導入
- ・そらカフェ、親の会にオンラインを導入
- ・PCの追加導入 ・タブレット端末2台の導入
- ・上記に伴うネット環境や機器等の整備

<成果と課題>

緊急事態宣言下においても、安全に各種会が実施できるという点で、オンライン会議システムの導入は革新的であった。距離等の制約がないことで参加できるという利用者のニーズもあり、今後も継続して活用していく。
また、不登校や引きこもり傾向の子ども達にとって、学習やコミュニケーションを広げるツールとしても、大いに期待ができる。
タブレット端末の導入は、子ども達の興味・関心を大きく伸ばした。共通の話題を見つけるきっかけとなり、子ども同士のやりとりが生まれた。スタッフにとっても、子ども達の価値観や世界観を知ることはコミュニケーションの糧になり、また別の話題や活動へ発展していく。
タブレット利用の際のルールを設け「順番で使うこと」や「タイマーをかけて30分使用したら休憩を入れること」など、子ども達から社会性を引き出すきっかけにもなっていた。



次年度への課題は、このICTの環境整備をいかに発展させていくかである。オンラインでの学び・体験の実施、想像・表現活動への利用、GIGAスクール構想が開始する小中学校との連携などを検討していく。





1. 不登校の子どもの居場所づくり事業

(3) 親支援

①「ウイズYOU」「親父の会」(助成事業柱立て3)

<目的>

不登校の子どもをもつ親が安心して話せる場の提供、親同士が繋がれる機会の提供を通して、家族の孤立や閉塞感を最小限にし、親同士のネットワークを強化する。

「ウイズYOU」 毎月第3土曜日10時～12時 年10回開催 参加者：延べ35名(実14名)
「親父の会」 毎月第4土曜日17時～19時 年9回開催 参加者：延べ15名(実2名)

<成果>

「ウイズYOU」は地域密着の広報と「登校拒否・不登校を考える東京の会」への入会等による効果が出始め、口コミでの参加、学校や他団体からの紹介、他市からの参加、主任児童委員の見学、実習生の見学など、参加者に広がりが見えた。

今年度は特に親同士の繋がりが目に見え、活発な情報交換や、新しい参加者を受け入れる姿勢や経験談の提供、分かち合いの時間など、個別相談では見られないグループワークの良さが発揮されていた。

年度末の「居場所展」にも多くの参加者に当事者の声を提供いただき、来場していただいた。

不登校や引きこもりに劇的な変化がおこることは少ないため、長いスパンで子どものことを話せる場の存在は大きい。子どもや家族の近況、自身の気持ちを定期的に話し、それを共有できる人が居続けるといことが、伴走型の支援に繋がる。来年度も引き続き、この場を守っていきたい。

「親父の会」は新規事業である。これまでの取り組みの中で必要性は感じてきたが、対象者側のニーズが不明な中での事業実施となった。市内小中学校をはじめ関係各所への広報を行なうが、そこからの申し込みは無かった。「ウイズYOU」などの利用者がパートナーに声をかけ、2名の参加が実現した。PSWの和賀氏をファシリテーターに、リラックスした雰囲気会となった。参加者2名は毎月参加し、回を重ねる毎に、子どもへの視点や理解に広がりや深まりが感じられた。

「最初は参加することに抵抗があった」「参加のきっかけは妻に言われて仕方なく」と言った感想から、やはり参加に至るまでのハードルが高いことが分かった。

だが、参加者のパートナーからは「親父の会に参加してから子どもへの声かけが変わってきた」「楽しんで参加している様だ」という声をいただき、実施者側には大きな励みとなった。

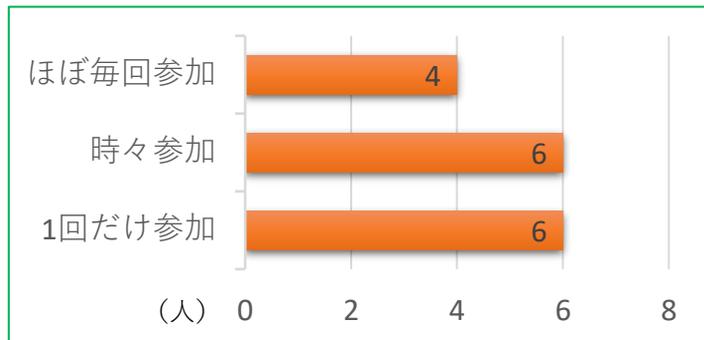
<課題>

親の会に来ることが難しい保護者や、しばらく親の会から足が遠のいている保護者への丁寧なフォローやアプローチが今後の課題である。また、保護者は親の会に来ているが、子どもが引きこもり状態の家庭を居場所にどう結び付けていくかも検討する必要がある。

参加者満足度 (回答数7名)



参加者16名の参加頻度





1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (3) 親支援 ①「ウイズYOU」「親父の会」(助成事業柱立て3)

親の会によせて

ウイズYOU参加者 Yさん

子どもの不登校のことで学校のカウンセラーには相談に通っていたものの、他に相談できるママ友もおらず子ども自身も誰かにつながろうともせず、ネットで見つけたゆいゆいの親の会に恐る恐る参加申し込みをしたところ、明るい声で、ぜひお越しください、とのこと。

それでも当日は気が重くなり、子どもの何を話そう、何を話さずにおこう…、と考えもまとまらないまま少し遅れて現場に向かう。落ち着いた民家そのままのドアをくぐると中から笑い声が。部屋に入ると「どうぞどうぞいらっしゃい、今皆さんの最近の推しを聞いていたの」とファシリテーターの方が。想像していたのと違う…と促されるまま自分の最近お気に入りの本や映画の話少々(熱く)。初めて会う他のお母さんたちも興味津々で聞いて下さるのでつつい熱が入る。自然と場に和んだところで「最近子どものことで気になること」などのテーマに話題が移り、他のお母さんの話を順に聞いているうちに、何を言おうか迷っていたことが嘘のように「わかるわかる」「本当に不安だね」「学校に言ってもいいのかな」「先生にはどこまで」「父親はなぜ」「どうやら本人はそう思うらしいんだけど、でも」・・・心当たりのあることばかり!!!

子どもの年や仕事や暮らす環境は違えど、皆子を思い、信じているけれど、それだけに、群れから離れて独自の道を行く我が子の日々を「不安」に思わない親はおらず。学校の健康診断や給食費、プリント類について、学年イベント出欠や、進級前の面談について…細かい情報がどこに行ったら手に入るのか。不登校時の生活、進路、兄弟関係、ゲーム…事務手続きや事務連絡以外の日々浮かぶいろいろな葛藤をどこで吐き出せばいいのか。わからないことを聞きあったり教えあったり。笑ったり頷いたり、涙が出そうになったり…。全て語りたくないし語れないけれど、そこに仲間がいたという気持ちでただ無性にホッとしてしまう場。他のお母さんの気づきや生きた経験、自分で見つけた子どもとの課題にその人なりに立ち向かう姿に励まされ、心から応援したくなる場。頑張ってるね。頑張ろうね!

終了時間はすぐに来てしまい去りがたい気持ちで離れます。今日ここであったことは子どもには話さないけれど自分の中に少し風が通ってまた一人家で待つ子に帰ったら美味しいものでも用意してただすっきりした顔で話を聞いてあげることはできそう。ゆいゆい親の会は私にとってそんな場です。

参加者の声 (アンケート自由記載より抜粋)

- 気持ちを吐き出せる場所。そして参加者の皆さんと共有できる事が自分の安心感にもつながる。
- 異業種交流的な面もあり仕事に生かせる情報も得ることができる。
- 少人数かつ暖かい雰囲気の中で子供や自分のことを話すことで、状況や気持ちを整理できる貴重な場所。
- 親同士が繋がることで、色々な情報を得ることもでき、いつも勉強にもなります。
- みなさん非常にオープンマインドで話しやすい雰囲気をつくってくれます。
- 同じ境遇の親御さんと話ができるとそれだけで気持ちが楽になります。問題が解決するわけではないけれど、今の状況や気持ちを聞いてもらえたり、他の子どもたちの話を聞くと安心できます。
- 学校に行けなくなった子供の話や相談、他の方の考え方などが聞けて、心に余裕ができる。
- 同じ境遇にいる者同士、共感できたり情報が得られたり、何でも話せて聞いてもらえるとても居心地の良い時間です。
- 不登校の話からちょっと離れて自分の好きな食べ物ややりたい事などを話せたりした時が、久々にこーゆう話しをしたなあと思いき楽しかったです。
- 男性の参加が増えるといいですね。行きづらいと思いますが。





1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (3) 親支援

②保護者面談の実施

<目的>

- ・居場所利用者の親と信頼関係を築き、子どもを共に見守っていく環境作りをする。
- ・保護者と情報交換を行い、その時の子どもの状態にとって最善となる対応を検討できる。
- ・保護者が客観的・多角的な視点で子どもを捉える機会となる。

面談回数：年20回実施 実数10名

<成果>

面談は担当スタッフ2名体制で行った。親の会のような、グループで話す場が苦手な保護者も、個別面談であれば足を運んでいただけた。

問題の改善や解決を目的とはせず、保護者にとって居心地の良い空間であることに重点を置いた。学校や適応指導教室等では、不登校の家庭の保護者と連絡が取れないということが課題に上がる。要因の一つとして、保護者が関係機関とのやり取りに負担感を伴うことがあるだろう。

面談での丁寧な関係作りは、保護者との日常の諸連絡をスムーズに行うことにおいても有効であった。また、前年度まで連絡を取り合うことが困難だった保護者との面談が実現し、お互いの顔が見えるようになった。それにより、その後の関係者によるケース会議の実施に繋がった。

<課題>

面談の方法や内容については、その都度準備とフィードバックが必要だと感じている。

また、スタッフと保護者の適切な距離感や、基本的な対人援助技術などを学び訓練する機会も設けたい。

③アウトリーチ（助成事業柱立て6）

<目的>

外に出ることや居場所に足を運ぶことが困難な子どもに対し、親からの要望を受け、外出や居場所利用のきっかけづくり・促進となるよう、訪問や送迎を行う。訪問で、短時間子どもの遊び相手・保護者の話し相手になることで、家庭の風通しが良くなる。また、子どもと家族のニーズを確認し、居場所を含めた地域資源と繋がる可能性を計る。

家庭訪問：年19回実施 実数6名（うち1名は学校からの依頼により訪問）
送迎支援：年62回実施 実数7名（うち1名は週平均2回程度、定期的を送迎）

<成果>

訪問：不登校および引きこもり傾向のある子どもが、自宅という本人にとって安全な場所であれば、他人と話す・遊ぶなどのコミュニケーションをとることができた。家庭の現状のニーズにマッチする、即時に利用可能な既存の制度が見当たらなかったため、そこを埋める試みであった。即時性と柔軟性は民間の強みでもある。訪問の後、本人が居場所まで見学に来るといった展開も見られた。

送迎：不登校の子どもの中には、朝起きられない子どもも多い。午後から、登校や活動がしたいというニーズがあっても、保護者が勤務中であればサポートすることができない。不登校の子どもをもつ保護者にとって、送迎のニーズは高い。子どもにとっても、自らのエネルギーだけでは動き出せないが、送迎のサポートがあることで一歩が出る場合がある。送迎支援の利用により、定期的な居場所利用が実現しているケースもある。

<課題>

居場所運営を安全に行うには、常時最低2名のスタッフが必要であり、同時進行でアウトリーチ行うには、スタッフの人員が不足する。ニーズに迅速に伝えていく為の体制づくりが必要である。

また、アウトリーチを行う為のスタッフの育成も必要である。





1. 不登校の子どもの居場所づくり事業

自分を主語にして話をする

精神保健福祉士 和賀未青
(株式会社ニイラ 代表取締役)

私は、令和2年度居場所のアドバイザーとして、スタッフの育成講座としての月2回の研修、そらカフェ、ウイズユー、親父の会に関わらせてもらった。特にスタッフの育成については、スキルを学ぶことよりは自分自身の理解を深めるための対話を行った。日常何気なく通り過ぎてしまう自分の感情や思い、喜怒哀楽や自分の価値観について、対話を通して理解していくプロセスを大切にしたい。それは、話してみても初めて気が付くことも多く、自分自身にとっての当たり前と、他人の当たり前は違うということを対話の中で気が付くこと。正解、不正解の2軸で考えないことや自分の思う正しさだけに囚われないことにもフォーカスした。

個人の思いを大切にと思いながらも、集団で動くことが多い現実。まして、不登校のお子さんはその集団に馴染めずまたは違和感を持っていることも多い。1人1人の感じ方の違いを理解していなければ、支援する側の「やってあげたい」気持ちだけが独り歩きしてしまい自己満足な支援になってしまう。国家資格があるかないかではなく、支援をする立場にある人は自分の喜怒哀楽に素直にそして正直に表現し話をするのが、自分と他人の違いを理解することが出来る。自分のニーズに気が付かないと、相手のニーズにも気が付くことは出来ないのだ。支援とはあくまでも「やってあげる」ことではなく、「自分でできるように」見守り伴走していく事なのだ。

そらカフェ、ウイズユー、親父の会でも同様に自分が感じている事、考えている事を対話することを中心に進めた。スタッフ研修でも同様に繰り返し伝えたのは「自分を主語にして話をしてください」という事であった。これは、日本語の特徴でもあり主語を明確にして話すことは少ない。意識をしていないと何か話すときには「私は」を付けずに話をしてしまうことになる。「私は〇〇と思うけど、あなたはどうですか？」と私とあなたと主語をつけるだけでも、意見の違いを意識することが出来る。不登校のお子さんについて悩んでいる時に、自分の感じている事と子どもが感じている事と分けて考えられることは「自分が子育てを間違ってしまったせいではないか」と感じている親御さんには、母親や父親が全ての原因にはならないというメッセージにもなる。人は自分の事も他人の事も全ては理解することは出来ない。だからこそ、コミュニケーションを取って、考えたり感じたことを自分の言葉を使って表現して相手に伝える。

子ども、親、支援者、それぞれの立場の人が自分を大切に出来るように。ウイズアイが長年行ってきた支援の形が、様々な立場の人の救いになっている。支援する人、される人という関係性だけではない形での支援の在り方は、ウイズアイならではの強みであると思っている。



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業

(4) ネットワークとソーシャルアクション

① 様々な連携

I 他機関・多事業との連携とケース会議の実施

アートの日の実施

近隣の障害者支援施設「ひだまりの里きよせ」のアート担当職員による、月1回の「アートの日」を実施した。(毎月第2水曜日午後)他機関との連携で、子どもはより多くの大人と信頼関係を築くプロセスを体験でき、スタッフも新しいアプローチ方法を学ぶことができた。

就労支援

「ひだまりの里きよせ」との連携で、就労支援もスタートした。22歳の利用者が、10月より「ひだまりの里きよせ」にて週に1度のプレ就労を開始。最初は居場所のスタッフが現地まで同行していたが、すぐに一人で出勤するようになり、現在も継続している。今後も団体間で情報共有しながら、サポートしていきたい。また、元居場所の利用者である高校生が、当団体の一時保育事業でアルバイトを開始。地域の中での継続した見守りが形となり始めた。



プレ就労で利用者が制作したハンドメイドバッグ

自立支援

中学生以上の利用者は、当団体の「若者の自立支援事業」とマッチングを行い、ボランティアの大学生による学習支援や、生活力をつける為の料理講座に参加した。

ケース会議

利用者のうち3名(20歳・中学3年生・高校2年生)について、関係機関が集まり、検討やケース会議を行った。子ども家庭支援センター、病院、勤務先、グループホーム、担当の相談支援専門員、主任児童委員、地域支援を行う社会福祉士など、各々がこれまでどのような関わりや支援をしてきたか、その中で気づいた点などを共有し、今後の対応を検討した。関係機関との連携は、支援の層が厚くなるだけでなく、お互いの安全性を高める。1つの団体が抱え込むことなく、それぞれの強みを活かした支援を目指す。

進路サポート

今年度は3名の利用者が高校へ進学した。担当のSSWと情報共有し、居場所に求められる役割を確認した。進路指導についてはノウハウのある最適な機関が他にある為、居場所では子ども達のモチベーションを保つこと、充電の場になることに重点を置き、子ども達の希望や期待、迷いや不安に耳を傾けた。

II 学校・行政との連携とアウトリーチの実施(助成事業柱立て6)

教育委員会

2020年5月、教育委員会を訪問し挨拶と事業説明を行う。その際、両団体の協定についての検討案も上がった。今後協定が実現できるよう教育委員会と検討を重ねたい。

市内公立小学校・中学校

市内の全公立小・中学校への挨拶と事業説明を実施。学校長にお会いし直接事業説明を行えたことは大きな成果である。スクールカウンセラーの紹介により繋がるケースも出てきた。また、市内小学校の学校長より協力依頼が2件あった。教員と共に自宅への訪問を行うなど、学校と連携したアウトリーチを行った。

1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション

②そらカフェ (助成事業柱立て2)

不登校や引きこもりの当事者、家族、経験者、支援者、地域市民等が、それぞれの立場の垣根を越えて話し合うオープニングミーティングの場

年9回実施 6月より毎月第2木曜日 14時半～16時半

会場：清瀬育成園ひだまりの里きよせ会議室、みんなのお家ゆいゆい

対象者：不登校や引きこもりの当事者・家族・経験者・支援者・関心のある方

利用者：延べ68名 実数32名

アドバイザー：原田和幸氏 (目白大学准教授、むさしの地域若者サポートステーション相談支援員)

：和賀末青氏 (精神保健福祉士、株式会社ニイラ代表取締役)

- 目的：①地域の不登校や引きこもりについて関心を高め、地域の問題として共に考える土壌を作る。
 ②参加者同士を繋げ、多職種連携による支援の実現や、必要な新しい支援を生み出していく。
 ③生きづらさの要因にもなっている、不登校や引きこもりの社会的イメージの変化を目指す。

特徴：多様な参加者

これまでの参加者の属性

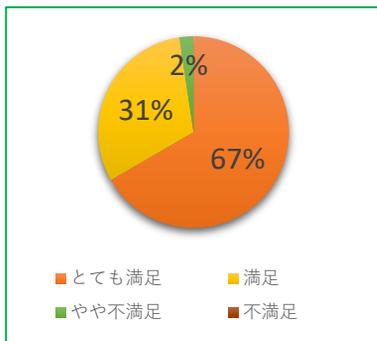
- 不登校・引きこもりの当事者家族
- 不登校・引きこもりの当事者、経験者
- スクールソーシャルワーカー
- 学校支援本部地域コーディネーター
- 社会福祉協議会/ボランティアセンター長
- 中学校教員
- 相談支援専門員
- 親の会運営者
- 障害福祉職
- 精神保健福祉士
- 病院事務局長
- 大学実習生
- 助産師
- 特別支援教育支援員
- 民間カウンセラー
- 子どもの居場所運営者
- 主任児童委員
- 児童養護施設職員
- 居場所スタッフ
- 子育て支援者
- 看護師

<成果と課題>

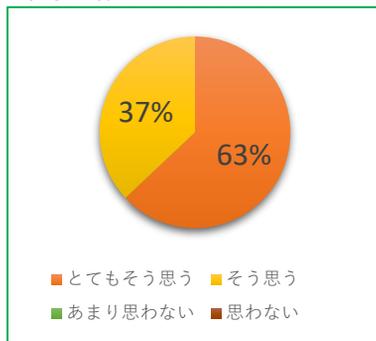
様々な立場の参加者が、安全に対等に話し合えることが「そらカフェ」の特色である。その中でも今年度特に印象的であったのは、不登校・引きこもり当事者の参加である。これまでは当事者家族や経験者の参加にとどまっていたが、今回、自分の経験を人に話すという段階まで来た18歳の当事者が参加してくれた。「イライラすると思うけど、待っていてあげてほしい」という当事者の言葉には、大きな重みがあった。これを機に、セルフヘルプグループやピアサポートグループの立ち上げも視野に入れた展開をしていきたい。今後の課題は、行政や学校関係者の参加促進である。広報の検討や見直しの他、感心の高いテーマ設定や、講演会の同時開催等、利益を期待できるような工夫が必要である。

居場所スタッフ研修事後アンケート 全7回実施 延べ41名回答

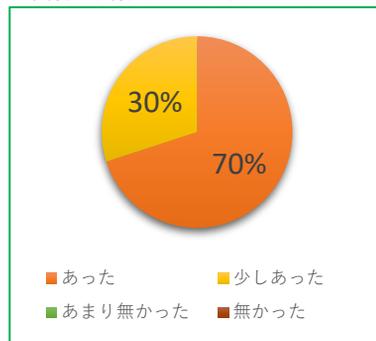
満足度を教えてください



参加したことは、ご自身の生活・仕事に活かそうですか？



参加してご自身の考えや気持ちに変化・気付きはありましたか？





1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション

「そらカフェ」によせて

目白大学准教授 原田 和幸
(むさしの地域若者サポートステーション相談支援員)

当事者、家族、教師、支援者、地域住民（ボランティア）などが立場を超えて理解しあう場を目指したことに大きな意義があったと思います。立場にこだわらずに不登校の背景や置かれている状況を理解しあうことは、地域におけるサポートネットワークのあり方を検討するために必要不可欠であることがわかりました。

学校に行くこととはどのようなことなのか、当事者が語る様々な事情をふまえて改めて考え直すことで、学校をはじめとした子どもたちを取り囲む環境のあり方を問い直すことの意義を確認することができたと思います。

どのような社会資源を使ってきたか、それによって何がどう変わったか、地域の社会資源を活用する上での様々な課題など、ざっくばらんな対話から様々な課題が浮き彫りになりました。子どもたちの成長や発達を第一に考えて子どもが育つ環境を関係者が一丸となって考えることで、不登校という課題を解決できる可能性が見えてきた意義は大きいと思います。

より多くの人々がそうした課題を共有し、様々な可能性を議論・模索し続けることで連携が頻繁に行われることで、子ども達が成長する場がどんどん広がっていくのではないかと思います。そらカフェはそうした様々な出会いや機会を生み育む場所であると思います。今後もそうした活動を継続し、より多くのつながりを生み出せる場へと発展していくことを期待しています。

参加者の声（アンケート自由記載より抜粋）

- こんなにもたくさんの大人や関係機関が居場所の子達の為に動いていることが驚きでした。
- 具体的な体験を話して下さって、保護者、子どもの心情を詳しく知ることが出来ました。
- 地域の方と密に話が出来て良かった。児童養護施設のことも知って頂く機会となると有難い。
- 不登校の子どもさんの気持ちを理解する想像力を養いたいと痛感しました。
- 支援を必要とされている方の「掘り起こし」的なつながりができた。

不登校をきっかけに、親や周囲の大人はこれまでの生き方や価値観を見直し、成長するチャンスを貰っている。

- 清瀬の多業種連携の豊かさがうらやましく思えました。
- 様々な方と関わることで、日本の教育を変えるきっかけになるのではと希望をもった。
- 不登校や教育に関して話す場があるのがよい。
- 子どもたちを取り巻く地域や周りの大人がつながることの大切さを改めて感じた。

「そのままでもいい」と言いつつ、社会的にはそのままでは難しい。認められないということを感じた。

- 不登校がマイナスなことと決めつけず、不登校なら何ができるかなどプラスに考えられた。
- 今まで子供に焦点を当てた支援を学んできたが、家族に与える影響も大きいものであり、どちらも視野に入れた支援が必要だと感じた。

当事者の力を見出す視点を大切にすることが必要だと思った。

- 問題に向き合う家族の声を聞くことで、自身の仕事で何ができるんだろうと考えた。
- 声をあげられない人に対してどうするか。ということ、いろんな視点から、感じられた事。



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション

③ 「居場所展」の開催

目的Ⅰ 居場所の取り組みの周知

活動のあゆみ、居場所の様子や各種会の様子をパネルで紹介。「にじいろだより」や各種チラシの展示・配布。

目的Ⅱ 不登校に関心をもってもらう

子ども達や保護者の声をありのままに伝える。親の会やそらカフェ、子どもへのインタビューを通して出てきた実情や心情を発信。

目的Ⅲ 当事者親子へ情報を届ける

居場所の様子、親の会に寄せられた情報、そらカフェで構築された「子ども・若者サポートマップ」、経験談を含む進路情報の展示。

目的Ⅳ 利用者の表現の場

子ども達の作品展示。不登校を選んだことで少なくなってしまう発表の機会を作る。利用者家族が主役になる場・思い出の場を作る。

居場所展開催に向けて...

居場所では、これまで様々なイベントを行ってきた。

- 1年目
- 【うめのたけまつり】に出店(たこせん)
- 2年目
- 【コミュニティプラザひまわりバザー】および【ひだまりの里マルシェ】に出店(タピオカドリンク)
 - 福祉施設『療護園』にて「流しそうめん」実施
 - 柳瀬川にて「親子食堂B B Q」実施
 - 【森源太 LIVE in KIYOSE】の運営スタッフを体験
 - ・清瀬環境川まつりで広報活動
 - ・路上LIVE体験
 - ・当日スタッフ体験(準備・受付・片づけ)

コロナ禍の中で迎えた3年目、どんなことであれば出来るのか検討を重ね「居場所展」を企画。4つの目的を設定し、清瀬市教育委員会に後援を依頼。児童・生徒向けの大々的な広報は避け、教員を対象に清瀬市内の全公立小中学校へチラシを持参。その他、HP、Facebook、Instagramで広報活動を実施。

新しい視点...地域社会へ発信する

居場所展では子ども達の体験機会の創出という視点に加え、地域社会への発信にも重点を置いた。理由は主に2点ある。1つ目は、取り組みを知ってもらうことでサポーターを増やしていくということ。そして2つ目は、当事者(不登校の子どもや不登校経験をもち生きづらさを抱える若者とその家族)を取り巻く社会環境に働きかけるといことである。当事者が抱える困難には、個人的な問題以上に、社会環境(既存の制度や仕組み、一般的な価値観)から外れることによる困難さがある。もし、子どもの教育の選択肢がもっと広がれば...もし、不登校にスティグマが生まれえない世の中なら...目の前にいる子ども達は、一人一人みんな魅力的である。代えることなどできない「その子」の育ちを阻害する要因が社会側にあるのならば、私たちはそれを変えていかなければならない。子どもに困難が起きた時、地域で見守りサポートしていける社会を目指して。

居場所展「そらカフェブース」では独自の視点で製作した【清瀬市子ども・若者サポートマップ】を展示(左図)





1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション ③「居場所展」の開催

居場所展 <準備編>



チラシのデザインは、居場所を利用する若者が担当してくれた。iPadとペイントアプリを利用し制作。普段から居場所で絵を描いており、得意なことを活かした協力をしてくれた。(左写真)

入り口のホワイトボードは利用者の中学生在が担当。当日はこの絵を見て足を止める方も多く、絵に興味を持った小学生が来場してくれるなど、居場所を多くの人に知ってもらうきっかけとなった。(下写真)



居場所展開催へ向けて、1月2月の居場所は工作活動が増加。スタッフが制作を始めると、興味を持った子がやってきて加わったり、アイデアを出してくれた。居場所で普段何気なく描いている絵や、数々のハンドメイドも、居場所展の作品として展示。立派な素材ではなくても、額に入っていないなくても、かけがえのないその子の表現は、立派な作品になった。



会場の装飾に利用する為、手形取りを行った。好きな色を好きなように用い、カラフルで多様な手形が完成した。(左写真)

入り口の目を引く虹の飾りは、工作好きな小学生のアイデア。(中央写真)

前日の会場準備も子ども達が参加し、手伝いをしてくれた。(右写真)



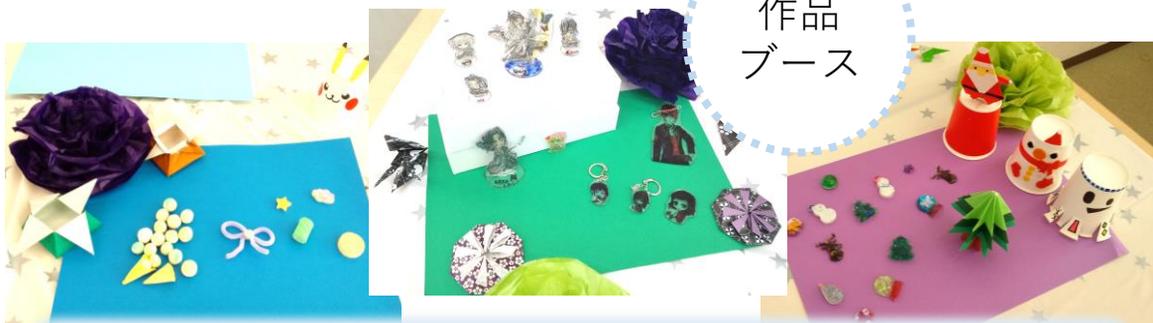


1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション ③「居場所展」の開催



居場所展 <当日編>

2021年2月28日(日) 10時～15時
清瀬市児童センターころぼっくる 2階会議室
総来場者数78名 大人48名 子ども30名(高校生以下)



作品
ブース

学校でも工作はすると思う。ここに展示してある作品は学校で作るのとは何がちがうのだろう。同じ事を学校ではできない理由...それが子供達が苦しくなる所なのかな。自由に表現できる場所、呼吸ができる場所があったよ。もし子供に何かあってもゆいゆいがあるから大丈夫かなと思った。 来場者アンケートより



作品を発表できる場所があると子ども達もはげみになり良いと思います。見る側も居場所について知る事ができ、良かった。 来場者アンケートより



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション ③「居場所展」の開催

居場所展 <当日編>



「親御さんの心のゆれ（子を受け止めてあげたい、将来への不安）を想像すると胸が締めつけられた。」
「お手紙の事や、給食費のことなど、気がつかないことがたくさんある」
「実際に生の声（親・子）を目の当たりにすると胸が締め付けられる感じがして涙が出ます。子や親が助けを求められる居場所、本当に素敵な場だと思います。」

来場者アンケートより

寄せられた親の声 一部抜粋

「分かってあげられなくて、ごめんね。」

「ダメならダメでしょうがないよね。一緒に考えよう。」

「死にたいと言う。生きてほしい。いつか死ぬけど急いで死ぬことはないよね。」
「時間が解決してくれるかな。」
「イライラしてこの子をあやめてしまいそうで、怒りをぶつけることがあった。」
「新しい自分に気づいた。価値観が変わったのかな。」
「学校へ行くのが当たり前とっていた。」

「子どもが学校に行かないだけで。何も変わらない。」

「うまくいかない。ずっとうまくいかない。うまくやろうと思うと辛い。」

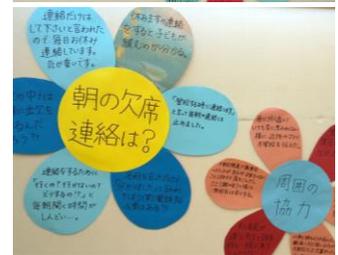
「先の見えない不安。」
「やることは、頼まれたらやってあげる。先回りしてやらない。」
「出来ることを増やしていくように。スモールステップ。」

「親の方が『無理なくていいよ、勉強おいつけなくていいよ』という気持ちの体制ができていても、子どもの方がやっぱり皆と同じことをしたい、皆に追いつきたい、という気持ちも持っている。」

「アドバイスは求めていないし、話を聞いてくれるだけでいい。」

「先の事を考えても仕方がない。今のベストは何かな。」
「学校行っていた時の方が不安。泣いてイライラして、それがなくなり安心した。」

「不登校はかわいそうじゃない。」

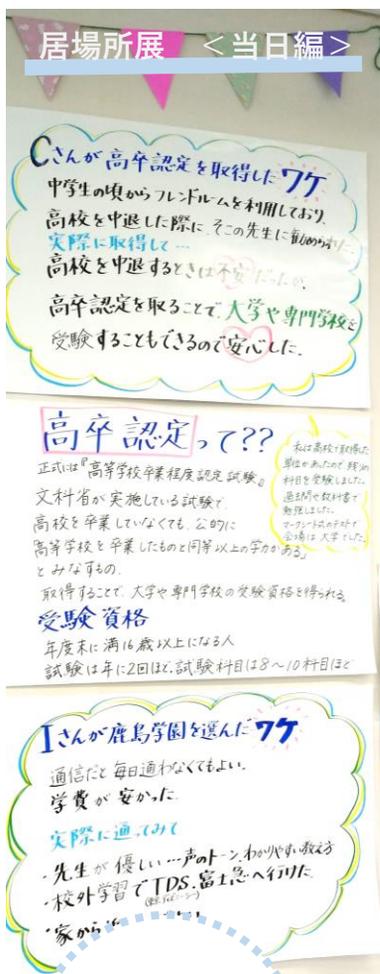


親の会で出た『みんなに訊いてみたいこと』誰に聞いたらいいか分からなかった...という声が多数あげられた。(上写真)

親の会の参加者の皆さんに、たくさんの寄稿をしていただいた。(下写真)



1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション ③「居場所展」の開催



- 子ども・若者サポートマップ掲載リスト**
- 【行政・教育・公共】
 - ・教育相談室
 - ・適応指導教室
 - ・子ども家庭支援センター
 - ・社協ボランティアセンター
 - ・市内図書館
 - ・児童センター
 - ・コミュニティプラザ
 - ・発達支援センターとことこ
 - 【福祉施設】
 - ・ひだまりの里きよせ
 - ・ベトレハムの園病院
 - ・療護園
 - 【民間】
 - ・市内子ども食堂
 - ・おひさまネットワーク
 - ・若者の居場所てとて
 - ・手作りパンCaféくう
 - ・NPO法人こども劇場
 - ・さくらんぼの会(親の会)
 - ・子どもの居場所ゆいゆい
 - ・NPO法人ウイズアイ
 - 【近隣市、他】
 - ・NPO法人オニバスの種
 - ・どじょっこの会(親の会)
 - ・ひらけごま!
 - ・YourBigFamily
 - ・登校拒否・不登校を考える東京の会



そらカフェブースではそらカフェの趣旨や参加者の感想の紹介、そのネットワークを元にして作成した「清瀬市子ども・若者サポートマップ」、居場所の利用者の進路紹介などを展示した。

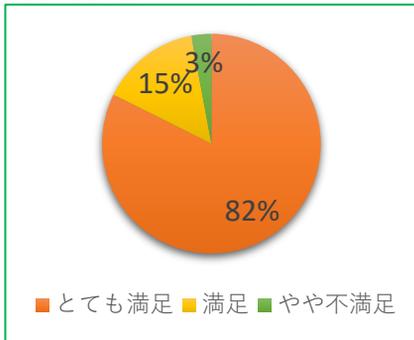
進路紹介コーナーでは、高校を中退するも高卒認定を取得した居場所利用者、高校を中退後に再度高校へ入り直した居場所利用者、サポート校を卒業した不登校経験者、フリースクールに通う当事者の親、不登校の子どもの受け入れを積極的に行う私立中学に通う当事者の親、現在社会人となっている不登校・引きこもりの経験者などから話を聞き、展示した。



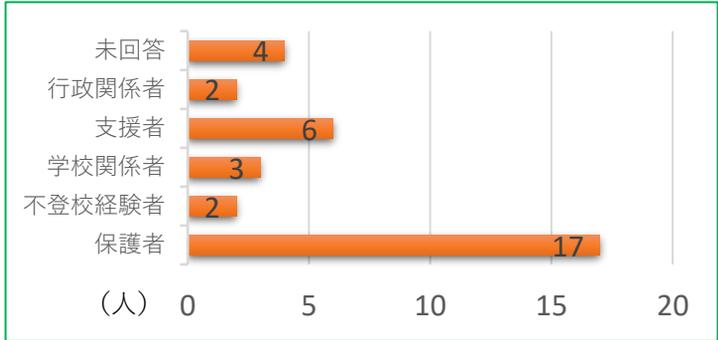
1. 不登校の子どもの居場所づくり事業 (4) ネットワークとソーシャルアクション ③「居場所展」の開催

居場所展来場者アンケート (来場者のうち大人34名が回答)

満足度を教えてください



アンケートの回答者の属性



来場理由・目的 (複数回答可)

- チラシを受け取ったから (6)
- 友人・知人から聞いて (11)
- 居場所について知りたくて (7)
- 不登校について知りたくて (2)
- 地域の子育て・不登校支援について知りたくて (6)
- 自身の学びのため (3)
- ウイズアイの活動に興味があって (4)
- その他... (10)
 - (たまたま来てやっていたので...3)
 - (本人または家族が利用している...4)
 - (Facebook、ポスター、スタッフからの案内)

良かったと思う展示物、掲示物 (複数回答可)

- 子どもたちの作品コーナー (25)
- 子どもたちの声 (インタビュー) コーナー (29)
- 「ウイズYOU」「親父の会」コーナー (26)
- 映像、写真 (10)
- 「そらカフェ」コーナー (11)
- 地域サポートマップ (13)
- 進路コーナー (16)
- その他... (2)
 - (子ども達に関わるスタッフの姿勢、態度)
 - (にじや、ちょうちょのデコレーション)

自由記載から抜粋

- **子供の本音**が大人達に伝わる場になって良かった。**親同士のネットワーク**も築ける場ができて良い。
- 学校関係者として感じるのは、**不登校がよくないというイメージでなくなる転換期**に、今あるということ。多様な場を用意し、個に応じた適した場があるのはとてもよいことだと思う。ただ、そういう場が大きくなり過ぎると今後、**どう連携をとるのか**ということが課題になる気がします。
- 関わっている方のリアルな声を知ることができ良かったです。スタッフの声ももっとあっても。
- 子ども達にとって過ごしやすい素敵な居場所であること、スタッフの皆さんの素晴らしさに感動した。
- 思った以上に支援団体が市内にいらっしやるのが分かった。ゲームというキーワードが多く目についたのが気になった。
- ゆいゆいを利用している子供達、お父さん、お母さんの生の声が知れてとても良かったです。ゆいゆいのような居場所は本当に大切だと思います。**学校の中にも**ゆいゆいのような居場所ができればいいですね。
- 子供が何を悩んでいるのかなぜ学校に行けないか、色々理由はあるとは思いますがもっと知りたいと思いました。**何か社会がもっと彼らを支えられることがあれば**と思います。



2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業

対象：未就学の重度心身障がい児、医療的ケア児とそのご家族

目的

- ★孤立しがちな未就学の重度心身障がい児、医療的ケア児のご家族同士、日頃の思いや情報を共有しながら交流を深める。
- ★楽器や歌を取り入れた音楽療法や、コンサートを親子で体験して頂く。
また光を使った遊びを取り入れることで親子のリラクゼーションを図る。
- ★兄弟姉妹の行事、冠婚葬祭、リフレッシュしたい等、ご家族のレスパイトを支援する。
- ★重度心身障がい児、医療的ケア児の兄弟姉妹を支援し、きょうだい同士の交流も図る。
- ★本事業に関わる様々な団体や個人のネットワークが強化されることで、各々の持つ強みを発揮し、地域力をつける。

方法

- ★家族交流会の定期開催
- ★コンサート、防災講座の開催
- ★先輩ママとの情報交換会
- ★一時預かり保育（本人、兄弟姉妹）
- ★兄弟姉妹の保育によるケア
- ★支援関係者のネットワーク構築に関する報告書作成、関係機関に配布

年5回実施（2020年9月～翌年3月）
第3土曜日 10時～11時半
会場：清瀬市児童センター地域活動室
参加者：延べ22家族（56名）

独立行政法人福祉医療機構
山梨助成 社会福祉振興助成事業

障害をもつお子さんの 家族交流会

親子で♪家族ぐるみで♪楽しもう！
歌や音を使った楽しい遊びや、情報交換タイム。
看護師、保健師、理学療法士が同席します。

日時：第2日曜日 13:45～11:30 (受付9:45)
(R2年9/26、10/17、11/21、12/19、R3年1/16、2/20、3/20)
*中止、日程変更の場合がありますので、ウイズアイHPをご確認ください。

場所：こぶづる 地域活動室

対象：未就学の重症心身障がい児、肢体不自由児、医療的ケアのあるお子さんとご家族

定員：4家族

参加費：無料

その他：こきょういも一緒にどうぞ！

問合せ：特定非営利活動法人 ウイズアイ 042-452-9765 info@with-ai.net

申込制になっております。ウイズアイHP講座カレンダーより、お申込みください。⇒
安心してご利用のため、当席の間、マスク着用、体温測定、手洗い消毒にご協力をお願いします。【特定非営利活動法人 ウイズアイ】

家族交流会「きらきら」の流れ

- ★送迎、健康チェック
- ★オープニング
(絵本、季節の歌、手遊びなど)
- ★自己紹介
- ★メインの活動
- ★同室にて親子分離
親：ファシリテーターが入り情報交換など
子：看護師、保育スタッフによる遊び
- ★親子一緒に遊ぶ
- ★クロージング
(一言感想、アンケート記入、次回案内)



2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業

2020年9月 楽器遊び&光遊び



参加者によって
家族交流会は
きらきら
と命名

「子供達が楽しそうにしてい
てよかったです。特に楽器遊
びが楽しそうでした。」



2020年10月
障がいを持つ子どもの
先輩ママを囲んでの質問会



「先輩ママとの交流の場を設けていただき、あり
がとうございました。今回、初参加の小さなお子
さんには学校はまだ遠いことのように思えたかも
しれませんね。就学が近づいているタイミングで
は、聞きたい情報をリアルに聞ける貴重な時間
でした。清瀬の先輩の方だと、更に地域密着情報も
聞けるのかなぁと思いました。」

「先輩ママたちのうまく力が抜け
てる姿勢を見せていただき、励ま
された気持ちになりました。」





2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業

2020年11月
親子で手形足形アート
～クリスマスツリーを作ろう！～



「家で一人で育児をして
いる時より気持ちが楽
になりました。」

2020年12月
クリスマスコンサート



パパ、ママ、姉が
トーンチャイムを初
披露！練習を積み重
ね、お互いの絆が深
まりました！

「きれいな歌声に、すっかり
クリスマス気分です。子供
以上に母が癒され、楽しい
時間を過ごせました。」



2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業

2020年3月
スカーフ遊び&振り返り



「地元のお友だちが
増えて、心強く
嬉しく思います。」

「今後も交流が
深まっていけば
もっと楽しくなる
と思います。」



「とても楽しかったです。少しずつ輪が広がっていったらいいなあと思います」

「思っていた以上に重度の子供達が参加していたことに驚きました。

でも、誰でも楽しめる時間は作れるということを実感しました。」

「親子ともども交流できて、この会を作っていただけて嬉しいなあと思っています。
次回も楽しみにしています。」

「清瀬特支に通ってるお子さんも来ていて、普段なかなか接点はありませんが、
障害を持つ子の家族として、同じ清瀬に住む仲間として繋がれたらいいなと思いました。
通園先の南多摩地域は児童発達支援施設が少ないなりに増えてきているという話を聞くに
つけ、清瀬のパパ・ママたちはどうやって療育や生活をしているのか…

人数が少ないから？誰も声をあげないから？と疑問に思っています。

かと言って自分が動くぞ！という気概もないのですが…。」

<成果>

親子で遊ぶ時間と、親同士・子ども同士で交流できる時間をそれぞれ設けたことで、交流が深まった。親同士の場では保健師がファシリテーターとして入り、円滑な交流につなげた。子ども同士の場は、看護師と保育士が入り、安心安全な場で楽しめるよう配慮した。

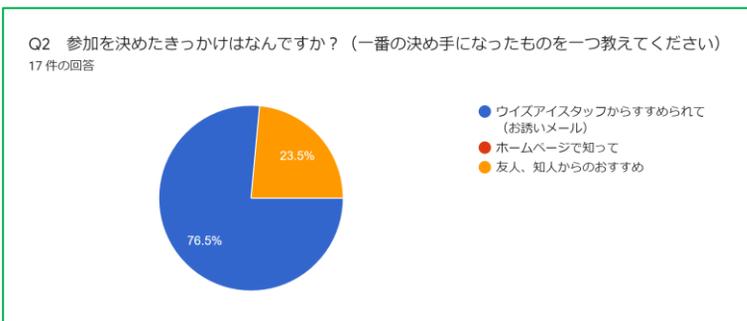
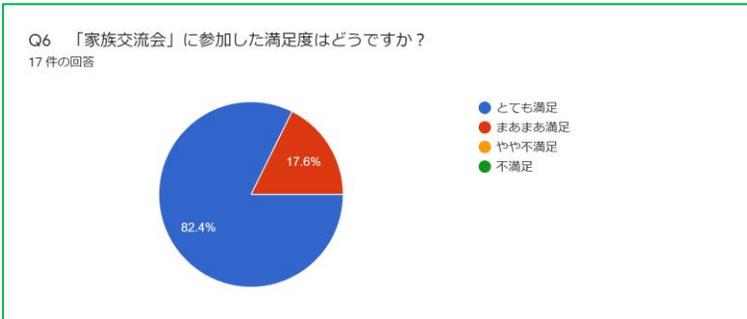
<課題>

きょうだいのネットワーク作りである。理由として、参加兄弟が少なくネットワーク作りには至らなかったことがある。しかし、きょうだいケアは必要であり、支援者側のきょうだいケアについての知識を高めることが課題であると感じた。

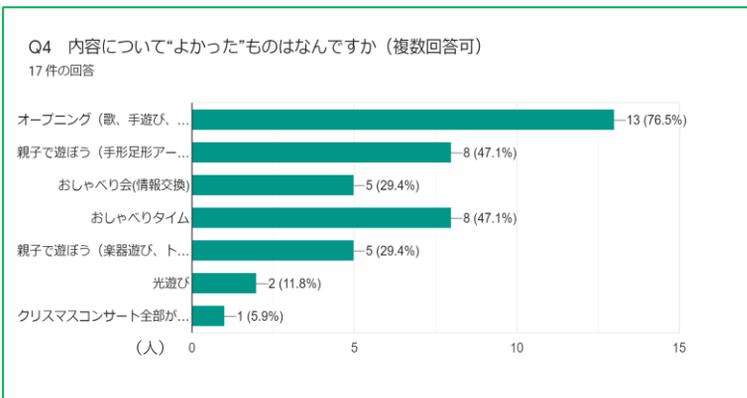


2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業

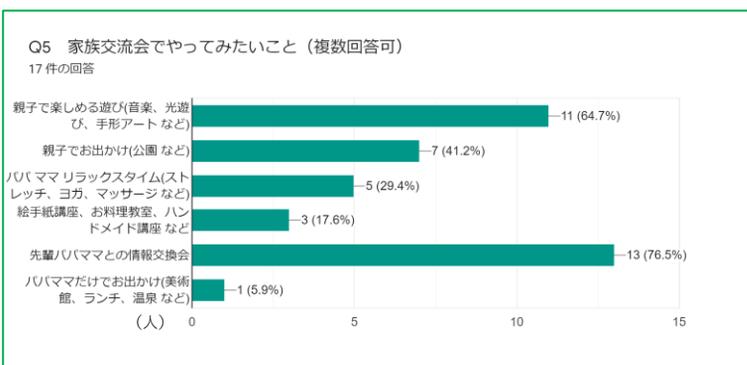
参加者アンケート (全4回、延べ18家族に実施。回答数17名。)



★ほとんどの方がスタッフや友人のすすめで参加されており、『ホームページで知って』参加された方は誰もいなかった。ホームページを充実させ、広く周知を呼びかけたい



★『親子で遊ぼう (楽器遊び、トーンチャイム演奏など)』の結果が少数だったが、Q5のやってみようでは、『親子で楽しめる遊び』が上位だった。次年度は障がい児が使いやすい、親子で楽しめる楽器の種類やおもちゃを充実させたい。またスタッフのスキルアップのため、スタッフ研修を開催し、親子遊びをより充実した活動にしたい。



★音楽療法も光遊びも、障がい児の活動ではよく使われ、脳の活性化や、心身に安定をもたらしと言われており、当活動でも積極的に取り入れたい。

★『親子でお出かけ (公園など)』が多数いたので、次年度はお出かけを活動計画にいたい。障がい児用の抱っこひもやおんぶ紐を取り揃え、お出かけ時に試して頂いたり、保護者、スタッフの移乗時の介助軽減に使用したい。また、災害時の安全安心確保のためにも、購入したい。





2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業

医療的ケア&重度心身障碍児の家族交流会「きらきら」実施によせて

特定非営利活動法人ウイズアイ理事 増田 恵美子

私たちの活動は、悩んでいるママ達の声から、いろいろな事業を立ち上げてきました。その一つが、4年程前に発足した育てにくさを感じるママの会「花✳️hana」です。我が子の子育てを通して、同じような悩みをもつママ達とつながりたい…そして、自分たちが世話役になって、先輩として、仲間として情報を発信していきたい、自分たちが悩み・苦しんだ思いや体験を話すことで、今子育てしている人達の悩みや苦しみを少しでも軽減するお手伝いをしたいとチラシを作成し、定期的な集まりを開催し少しずつ輪が広がっていきました。

そして「医療的ケア・重度心身障碍児の子どもを受け入れる場所がない清瀬市において、親子でつどい、親同士のネットワークを作りをし、一時保育やレスパイトできる場づくりができたら…」と夢を描きました。「地域で出会いの場をつくってもらい、市内に身近に知り合いができたことが嬉しい…」と言っていただけでした。コロナ禍の中、思うように定期開催はできなかったのですが、開催するとほとんど毎回休まずに参加して下さった皆さんに、支えられての事業でした。

「兄弟ケアも大事だね。」「親御さんに、少しはお子さんと離れてゆっくり話し合いの時間や、リフレッシュになる時間を持ってもらうには、どうしたら良いかなあ」と話し合い、保育士さんに毎回入っていただくことになりました。また、医療的ケアが必要なお子さんに安心して参加してもらうために、最終的には8人もの看護師さんたちが賛同し協力して下さることになりました。

地域共生社会とは、制度や分野ごとの縦割りや「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が我が事として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて「丸ごと」つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会…これが実現できた事業だったと自負しております。

そして、もう一つ、真の「多職種連携」が形として実現でき、団体の力のパワーアップが、図れ大きな成果につながったといえます。たくさん専門性の異なる職種が互いに連絡を取り協力しながら同じ目標に向かってご利用者様をケアすることができたこと…。

この事業を通して、たくさんのお出会い・ふれあい・学びあい・支えあい・助け合い…ウイズアイの理念が、形になった思いです。これから、この土台をより盤石にし、当事者の皆さんと共に、一時保育やレスパイトのサービスが提供できるよう、地道に取り組んでいこうと思います。福祉医療機構の助成を得て、医療的ケア&重度心身障碍児を育てている家族交流会を開催できたお陰で、最初の土台づくりができました。深く感謝いたします。

理学療法士 上木原 瞳

家族交流会の誕生は2019年春。『市内には、重度のお子さん、医療ケアのお子さんが通える療育施設や預け先がないよね〜』という話からスタートしました。『障がいをもつお子さん、ご家族に私たちが支援できることはなんだろうか?』と、スタッフで検討を重ねるも、なかなか答えが見つからず、『どんな支援が必要かは、当事者に聞いてみようよ。そして、私たちスタッフも、お子さんのこと、家族のことを理解することから始めようよ。』ということで、家族交流会が動き出しました。

コロナ禍で集まることに不安がありましたが、『同じ市内に仲間ができたことが嬉しい』、という感想を頂き、開催してよかった〜と思いました。会の内容は、参加者からの意見を聞きながら検討し、2回目には要望が多かった『先輩ママとの情報交換会』を開催。学校のお話などを聞く場を作りました。いろいろな情報がネットやSNSから得られる時代ですが、お子さん、ご家族同士が顔を合わせ、生の声を聞くことの大切さを実感できました。その後も、制作、コンサートなど開催。同じ場所で、家族同士、きょうだいも一緒に、おしゃべりしたり、音楽を楽しんだりすることで得られる空気感は格別です。

今後もウイズアイの理念でもある「みんなで一緒に、出会い、ふれあい、助け合い、支えあい、学びあい」を実感できる家族交流会になるように、参加者、スタッフ全員で育てていけたらと思います。





2. 医療的ケアが必要なお子さんを家庭で育てている親のネットワーク作り事業

医療的ケア&重度心身障碍児の家族交流会「きらきら」実施によせて

遊び講座担当・声楽家 浜田 泉美

障がいを持つお子さんの家族交流会～きらきら～を始めてみて、最初は仕事で障がいを持つお子さんと触れ合ったことがなかったので、不安や心配の気持ちがとても大きかったです。音楽やレクリエーションを担当しているのも、それらがどう子どもたちに影響するのか？気に入ってもらえるのか？そもそも楽しんでくれるのか？と思っておりました。

第一回のきらきらが始まり、オープニングでうさぎのぬいぐるみを持ち、歌い出した瞬間の子どもたちのキラッとこちらを向いた目や表情が印象的でした。それまでに抱いていた不安は杞憂に終わったのです。普段、接している健常の子どもたちと何も変わりませんでした。ただ、障がいについての配慮して欲しい面などを親御さんに聞いたり、同席した看護師にケアなどを教えてもらったり、少しずつではありますが安心して子どもたちとふれあい遊びが出来るおられます。

会を重ねる毎に子どもたちも会った瞬間に笑顔が出たり、まばたきでしたり、反応してくれるようになり、とても嬉しく感じています。又、会の中で親御さん同士が話している間、少しの時間ですが同室で分離となるのですが、その後合流すると、親御さんが晴れやかな表情に変化している事が印象的です。きらきらを開催していて良かった、また続けたい、と強く思う出来事でした。

課題としては、私が担当している親子で遊ぶレクリエーションをさらに多様にし、リラックして活動できるように勉強していきたいです。

看護師 縄田 碧

私がきらきらの会に参加して気づいたこと、特に印象的に感じたことを2つ述べます。

1つ目は医ケア児の家族は必要な時期に必要な情報を得られていない事です。家族が支援を必要としているのは産後すぐだけではなくありません。児と家族にとって、就学などのライフイベントは家族の生活スタイルと児の学校生活のスタイルの両立を考えなくてはならない等多様な助言が必要な時期になります。きょうだいの事、家族の年齢や仕事の状況等を考え、より詳細でリアルな声を家族は求めているように感じます。就学した医ケア児をもつ家族と未就学児の家族との交流では1時間では足りない程たくさんの質問が出ます。必要な時期に必要な情報を迅速に共有できるのが、家族会の強みであると感じました。

2つ目は、多職種による医ケア児へのアプローチが充実している事です。保健師、看護師の他に理学療法士、音楽家等の専門的で多様なアプローチを得られることで児と家族が楽しめる空間になっています。「家族会」ではありますが、家族だけでなく児も安楽な環境で音・色・感覚からたくさんの刺激を受けられるのは、他にないきらきらの会の特徴であると感じます。今後は、医療の進歩と同じスピードで行政機関や地域での支援の充実を図らなくてはならないように感じます。そして、きらきらの会を続けていくことで、不安を抱える地域の潜在的な医ケア児とその家族にも支援の手が広がるのではないかと考えられます。





令和2年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
引き籠りになりがちな養育困難家庭の子どもを社会で育てる事業
成果報告書

令和3年3月31日 発行

特定非営利活動法人 ウイズアイ

東京都清瀬市梅園2-2-29
042-452-9765

子どもの居場所専用
070-3827-8612 平日9:30~16:00
ibasyo@with-ai.net

この報告書には、アンケート結果・写真が掲載されています。
個人情報にご留意いただき、本報告書の取り扱いにご配慮いただきますよう、
お手に取っていただいた皆様にお問い合わせ申し上げます。